東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十卷第五號

昭和十五年五月

論叢

維新前後の開化思想……經濟學博士 本庄榮治郎

限界生產力說と勢力の問題……文學博士 高田保馬

時論

非常時局下に於ける日支の態勢……經濟學博士 石川興二

研究

販路說の過剩投資說への發展……經濟學士 青山秀夫

理想型の理論……經濟學士 出口勇藏

アウグスチヌスの共同體思想……經濟學士 澤崎堅造

說苑

蒙疆の人口と農業……經濟學士 菊田太郎

國民經濟的概念と經營經濟的概念……經濟學士 尾上忠雄

支那に於ける理想鄉思想……經濟學士 穗積文雄

附錄

彙報

外國雜誌論題

經濟論叢　第五十卷　第五號（通卷第千二百九拾九號）　昭和十五年五月發行

論叢

維新前後の開化思想

本庄榮治郎

一　維新前の開化思想

維新以後文明開化の聲が我國の津々浦々にまで及んだことは、今更いふ迄もないことであるが、その所謂開化とは西洋文明を我國に取り入れむとするの義なりと解するならば、かゝる思想は必ずしも維新以後のことのみではなく、維新以前に於てもその思想を見ることが出來る。

江戸時代の中期以後、西洋事情の研究が行はれ、時代の降るに從つて西洋文化再認識の必要に迫らるゝや、從來の如き西洋を夷狄の國として斥けんとする考へ方は次第に變化した。寛政年間に著はされた本多利明の「經世祕策」や「西域物語」は明かに從來の支那崇拜の思想を排して西洋思想を取り入れたものであるが、[1] 幕末に及んで

1)　拙著、近世の經濟思想、154頁以下。

は明かに我國も亦須く西洋に學ぶ所なかる可らずとの考を生ずるに至つた。例へば嘉永六年八月の海防掛の勘定奉行同吟味役等の上申書中にも『西洋の儀相辨居不申候ては彼を知、己を知の本文に背甚以て差支可申候。夷國の風俗人情を詳に相辨居不申候ては間違出來候譯に付、蘭學の軍學砲術を第一にして、多く翻譯被仰付候ハヾ可然哉、是等は學問中の御急務に御座候』[2]と述べ、西洋事情を知ることの緊要なるを論じてゐる。また嘉永六年十月の高島喜平の上書には『本邦の人情にて他を學候儀を恥と仕候得共、彼が心得にては他を學候儀を、國家の爲、力を盡し候者と感賞仕候儀にて、彼は諸國に航海仕、其善成者有之候へば、皆之を取候て自國の缺たる處に補ひ候。交易利潤を貪候も、國を富し兵を强く致し候爲めの主意にして、舊習に固着仕候習俗に無御座候間、他を學び候儀を聊恥と仕候儀は無御座候。却て他を學び不申を固陋と侮候程の儀に御座候』[3]とあつて、彼の長を採つて我が短を補ふべきことを說いてゐる。

橋本左內も安政二三年頃の「外國貿易說」[4]の中に

『一、外國民と引合候上は、品物之交易のみならず、智慧之交易肝要に御座候。卽製作使用之器械、經濟實用之談論をも交易致し度奉存候。

一、方今の形勢は、五大洲之模樣を先知仕候者大利を獲可申候。

一、彼之情を得、彼之長を習ひ、之を御國內に推廣め候はゞ、其利制產のみならずと奉存候。』

といひ、更に安政四年の學問所に關する布令原案の中にも『近世西洋大に學術伎藝を研究(中略)頗る實蹟を盡し且其精功を極め、間々皇國と雖未だ及はざる所を發明仕候故、彼之長伎を取て吾皇國の利器を御補足被成、皇國を

2) 大日本古文書、幕末外國關係文書之一、21頁。
3) 日本經濟叢書、卷三十二、477頁。
4) 橋本左內全集、4頁。

して益諸邦に勝れ候樣に被成度御趣意と奉存候。（中略）右等の御趣意能々相辨へ叨りに新奇便用を喜び、外國を夸稱して皇國を卑視致候樣の所行無之樣、心得爲仕度奉存候事。[5]』とあつて、西洋に學ぶべきことを說いてゐるが、『智慧の交易肝要に御座候』との一句は道破し得て妙なりといふべきであらう。更に佐久間象山が安政五年三月梁川星巖に贈りし書狀に於て『方今の世は和漢の學識のみにては何分不行屆、是非とも五大洲を總括致し候大經濟に無之候ては難叶候。全世界の形勢コロンビユスが究理の力を以て新世界を見出し、コペルニキユスが地動の說を發明し、ネウトンが重力引力の實理を究知し、三大發明以來萬般の學術共根柢を得、聊かも虛誕の筋なく悉皆着實に相成、是に由て歐羅巴・彌利堅諸州次第に面目を改め、蒸汽船・マグネチセ・テレガラフ等創製し候に至り候て、實に造化の工を奪ひ候儀にて、可愕可怖模樣に相成申候[6]』と云へることも亦西洋の學術を學ぶべきことを道破せるものではないか。

小栗上野介が安政條約交換使節の一行に加はつて米國に赴き、世界的識見を得て歸朝したとき、土產として持ち歸つたものは、地球儀や新しき器械類であつた。これは『世界を知れ』との警告であつたといはれてゐるが、知識を世界に求めんとする思想は既に早く幕末にも存してゐたのであつた。

以上の如き開化思想はいふ迄もなく開國論と密接なる關係を有し、やがてまた貿易是認論となり、更にその或る者は出貿易を唱へ、進んで海外經略論を說くものもあるに至つたことは注意すべきことであらう。

二　明治維新の舊物破壞

5）同上、17頁。
6）象山全集、下卷、845頁。

封建鎖國の幕府政治が倒れて明治の新政を見るに及び、舊弊打破・泰西文化の移入がわが國是となり、茲に所謂舊習一洗の時代を見、政治上社會上種々なる事項に亙つて、舊來の陋習を破り知識を世界に求むることが行はれた。かくて歐化の傾向は我國の各地に及び文明開化の叫び聲が高くなつたが、一方には既に早く新政府の舊習一洗事業に對して之を快とせざる者の不平が高まり、保守的反動思想が起り來つた。茲に於てか開化といひ舊弊といふ二つの對立があらはれざるを得ざるに至つた。

五ケ條の御誓文には『舊來の陋習を破り』と宣へられ、また『知識を世界に求む』と宣へられて居るが、我が國の舊習にしてその弊あるものを捨て、新に移入せられたる歐米習俗の長所を採用することは、いふ迄もなく當然のことであるが、明治初年の際には一にも西洋、二にも西洋、何でも彼でも西洋風でなければならぬといふやうに考へ、善惡ともに彼れの風を採り、我が國在來の風習は長短共に棄てゝ顧みざる風があつた。當時の所謂舊習打破・舊弊一洗の思想はいはゞ舊物破壞の念であつた。

舊物破壞は他の一面より見れば、その大部分は歐化運動である。歐米に發達せし文化は我が文化に遙かに勝れるを以て之を採用せざる可らずとし、從來我國に存する文物制度習慣は一切之を捨て、西洋の事物は一切無差別に之をとり入れんとしたものである。その善惡を問はず本邦固有のものを維持せんとし、若くは之に執着せる者は忽ち舊弊と罵られ、因循姑息と貶せられ、歐米の風を倣ふ者はすべて文明開化であるとせられた。卽ち西洋心醉が舊物破壞の大部分を占めて居た如くである。

三　明治初年の開化思想

明治初年に開化思想を說いた書冊は甚だ多い。[7] それは大抵は西洋文明に關する知識を通俗的に解說したもので、例へば肉食の必要、洋服の便利を說き、散髮を勸め、迷信を斥け、教育の必要を說き、或は進んで時事を解說し或は自主自由、權利義務などの新語に通俗的な解釋を下しなどする類であつて、要するに衣食住其他の風習につき西洋の事柄を通俗的啓蒙的に說明したものが多く、俗に『開化もの』といはれてゐる。然し明治の新政が單なる衣食住慣習の改廢ではなく、政治社會經濟上の一大改革であるため此等の『開化もの』のうちにも、政治經濟に關する諸點に觸れたものゝあることは勿論である。今その一二を示さう。

小川爲治著『開化問答』[8]（初篇　七年三月　二篇　八年五月）は進步的なる開次郎が、頑迷固陋の舊平の質問に對して懇切に開化を說いたものであるが、その問答中には藩を廢し府縣を置きしこと、門閥を廢し四民平等となせしこと、全國皆兵のこと、租稅の徵收、交易・鐵道・電信機・地券・紙幣、その他の實際問題に觸れた幾多の問答がある。當時これ等の新制のために舊慣を固守し陋習に粘着せる者が、時に一揆を企つる如き事態に迫つてゐたが、これ全くその見聞度量の狹く、眞の道理を知らざるためであるから、之を敎化する必要がありと考へ、因循姑息の舊習を打破して文明開化に向ふの必要ある所以を鼓吹したものである。

然し文明開化は必しも耳目に新らしきことのみを採り舊習を悉く捨て去ることではない。加藤祐一は其著「開化進步の目的」（六年十一月刊　木版本　二冊）に於て論じて曰く『開化日進といふ事、人々口には唱ふれども其目的とする處なく、

7）その一例として明治文化全集第二十卷、文明開化篇を見よ。
8）明治文化全集、第二十卷所收。

只なり形ちのみ外國人を眞似、人に異なりたる事するを日進と心得たる人多し。いと心得ぬ事なり。凡進むといふは何にもあれ目的を定めて其方にむかひて一途にすゝむを進むといふべし』と說き、開化の目的は『凡開化といふは只外國人の眞似するを以て開化とはせず、眞の開化の趣意といふは、政府も權威を以て人民の自由を妨くる事なく、人民も姑息の舊習に泥むことなく、廣く聞て其宜きを取り、廣く見て其便利に就き、新規發明の工夫を以て天下の有益を謀り、事物當然の正理に依て終身の進退を究むるを以て開化進步の目的となすべきなり』としてゐる。更にその著「文明開化」[9]（初篇　六年九月　二篇　七年五月）に於ても

『よく世間の人のいふことを聞くに、豚を喰ふたといふては文明じや。あいつは此頃蝙蝠傘さして步行をる。えらひ文明じや。沓はいたまゝで座敷へ上りをつた。こりやちと迷惑な文明じや。おまけにつれて來た犬も上りをつた。御札で鼻かみをつた。佛壇を毀ちをつた。えらい文明じやと、西洋人の眞似するか、耳に新らしい事、目に新らしい事、人に異なつた事さへすれば、なんでもかでも文明開化にしてしまふが、さういふものでもない。元來の趣意を知らいで、めつたむしようにに、耳目に新らしい事するばかりを文明開化じやとおもてはとんだ間違ひが出來る。文明といふは、文字でも考へて見るがよい、文にあきらかといふことで、廣く學んで世界中の事を知りあきらめ、其のよい所を取つて我身の心得又行ひとするを眞の文明ともいふべき事でムる。』

といひ、『只なり形ちばかりを西洋人に似せたり、又は意表な事するのを、文明とは申されぬ』と說き、『舊習じやからとて、ことゞくわるいといふわけもなく、開化めかした事にも理にかなはぬ事がなんぼもある。其中分を取て用ふるが眞の開化といふもの』と斷じてゐる。[10] この說は、世上の事實に於ては何等か新しく變つたことをすれば、それが文明開化であると考へてゐた當時に於ては、開化の眞義を說いたものとして注意すべきものである。

9)　明治文化全集、第二十卷所收。
10)　同上、5、41頁。

四　開化思想と交易論

開化は西洋文化の輸入が重要なる役割を占めて居る。從て前にも述べた如く開國貿易はまた開化思想の一翼をなすものといふことが出來る。幕末に於て既に開國貿易が實施せられ、貿易に關する贊否の意見が屢〻あらはれ學者のみならず、諸藩・幕府有司のうちにも開國交易を說いたものがあり、[11] 明治時代の西洋文化輸入の代表者の一人として知られてゐる神田孝平や福澤諭吉も、既に早く文久年間に、前者は「農商辨」[12]、後者は「唐人往來」[13]を著して交易の利を說いたものである。私は茲に明治初年の開化思想を說いたもので、外國貿易の必要を力說し、世人の蒙を啓くに役立つたものゝ一例として、加藤祐一の[14]「交易心得草」と加藤弘藏の「交易問答」とを擧げやう。

「交易心得草」（前篇明治元年、後篇三冊三年八月）は前後兩篇より成つてゐるが、前篇に於ては外國貿易の必要なる所以、及その仕法等を記し、後篇には商社・兩替・保險其他のことを論じてゐる。我國は氣候溫和、產物豐富で萬國に優れた國柄であるから、外國貿易の必要なきが如くであるが、有無相通ずるは天の道であると共に、國益を增進する所以であるから、外國貿易を行ふべしとし、幕末開國の後、物價騰貴し世人の生活困窮を惹き起したことは、惡貨鑄造の結果であつて、外國貿易のためではないと說き、外國商人は會社組織を以て貿易に從事してゐるから、我國に於ても外國貿易をなすには商社の法を立つべきであり、更に出貿易を行ふことが國益を增進する所以であるとしてゐる。また外國商人は引出し買によつて貿易の利益を壟斷するから、この策に乘ぜられざるやう注意すべきことを說いた。所謂引出し買とは何であるか、曰く

11) 拙著、近世の經濟思想續篇、第五章、第六章、第七章參照。
12) 淡崖遺稿に收む、增補農商建國辨は明治文化全集第九卷に收む。
13) 福澤全集、第一卷緒言中に收む。
14) 加藤祐一に關しては、菅野和太郎著、續大阪經濟史研究、第九章參照。

『外國人と交易するには品々のこゝろ得あり、まづ第一に心得べき事は外國人は交易にかしこければ引出し買といふ事をする也。たとへば生糸百斤八百兩程の品にても最初には千兩にも千五百兩にも買ふ也。我國の商人是を聞て我も我もと交易場に生糸を持出し、其品やゝ十分にみちたるをはかりて俄にすこしも買はず、我國の商人はるばるの旅路を持越たるもの、或は無理なる金子融通などして持出したる品、すこしも賣れぬ時は國許へ歸る事もならず、金子融通にはさしつかへ、據なく損毛をして捨賣に賣拂ふをまちて安く買ふ也。最初高く買ひしは餌にて魚の寄りたるを見て大網にかくる也。(中略)かやうの時に商社の法たちてあれば、此捨賣にせんとする時、商社にてことごとく買集め、すこしも其品を他へ出さゞれば自然外國人も相當の直段を以て買ふやうになる也。これを買集る事、たとへば、十万兩の品にても商社千人にて買へば、一人百兩づゝ出し合て手輕に買上げらるゝ也』

彼は更に輸出品たるべき商品の種類を擧げ、契約の履行を論じ、利を擧ぐることが卽ち富國强兵たる所以を明かにしてゐる。而して「交易心得草」全編の結論として論じてゐるところは、卽ち開化思想の肯定に外ならぬ。曰く、

『抑我が國は……天然の美國にて何ひとつとして足らざる事なき國なれば、庶民利をあらそふ樣なる事なき故、おのづから古來さだまれる商法の規則なく、飽食暖衣のあまり開拓互市の道などに盡力するもの少かりし也。世かはり時うつりたる今を以ていにしへにくらぶれば、やうやく人心狡黠薄情になり、ことに各國の人入來る世となりたれば、商法の規則たゝずしてはあるべからざるの時なり。その商法の規則と機械の製作とは西洋法を用ふるにしくはなし。何ひとつとして他に求むる事なき美國といへども各國交際のみち開くるにあたつては、萬國普通の法によらざれば損害多かるべし。他國の法といへども其よろしきをとりて用ふるは恥る事なし。既に往古より支那の法をもちふる事多し。諸經諸史の說、書畫技藝の法、器物衣服の制、十に七八は支那の法によれり。支那も西洋も我が國よりこれを見れば皆同一の外國なり、何の區別する所あらんや。さらば萬國の諸法を見きゝて其よろしきをとりて用ふるが則御國の益なり。我が國の困窮におちいらんとするも今日を以て始めとすべく、我が國を富國となさんも今日をもつてはじめとすべし。居ながらにして舊習を守らば忽ち困窮におちいるべし。便利の機械をひらき、萬國普通の法に因て商律をたて商業を盛にせば、三年を經ずして富萬國に冠たるべし。庶民皆盡力せざるべけんや。』

次に加藤弘藏(後の弘之)著「交易問答」[15](二年四月)は、頑六といふ保守主義者と才助といふ開國主義者との問答體に書かれたものであるが、開卷劈頭に頑六は『今度御公儀と申す者がなくなつて、天下の御政事は、天子樣でなさる樣になつたから、是迄御公儀で御可愛がりなさつた醜夷等は直に御拂攘になるだろうと思て樂んで居ましたら矢張以前の御公儀と同じことで、加之大坂や兵庫にも交易場が御開きになり、又東京でも交易を御開きなさるといふは何たることでござろう。どうも此頑六抔には一向合點が參り申さん』との質問を發し、交易による日本の疲弊を說いたのに對して、才助は產業の發達に伴ふ分業及貿易の必然性を說き、交易による物價騰貴は需要の增加によるものであり、需要の增加は自ら生產の增加となつてあらはれ、生產が增加すれば物價は自ら下落するものであつて、結局價格は需要と供給との關係によつて定まるものである所以を述べ、また國際貿易に於ては、外國の不用品を我國の有用品と交換する如きものではなく、鐵砲や艦船等從來我國に知られなかつた必要品もあり交易は双方に都合よく物事が整ふもので双方の身上がよくなるものである。米の輸入によつて飢饉の危險の無くなることも交易のお蔭であるとし、交易によつて一般に生活が向上するものであつて、今更、鎖國政策を採るべきに非ることを諄々と說いてゐる。その書き振りから見て所謂開化ものゝ體を具へたものであるが、當時の外國貿易に對する蒙を啓かんと力めたものとして注意すべき書冊である。

五　開化思想に對する反對論

明治政府の舊習一洗事業に對して屢不平が勃發し、明治十年に至るまでに各地に騷擾が起り、百姓一揆が頻發

15) 明治文化全集、第九卷、57頁以下。

したと同樣に、開化の新思想に對しても常に保守反動の思想が存した。其等の論者は舊弊頑固と罵られながらも憂國の至誠より種々の建白をなすものがあり、新聞雜誌に保守的思想の發表されたものもあつた。明治五年六月明治天皇が鹿兒島に行幸ありし際、島津久光は行在所に於て意見書を上つたが、それには『方今之御政體に而は御國運日を追て御衰弱、萬古不易之皇統も共和政治之惡弊に被爲陷、終には洋夷之屬國と可被成形勢』云々の言葉も見えてゐる。翌六年六月公は更に意見書の各箇條につき註解を加へ上書されたが、至尊御學問之事の條には『彼洋學の如きは一種の技藝にして至尊の急にし給ふ所にあらず』とし、立國本張紀綱事の條には『今や洋說橫行將に國本を傾敗するに至らんとす』とあり、定服制嚴容貌事の條には『今や悉舊典を破り貴賤等なく、內外分なきのみならず、上下一班西洋の冠履を用て耻とせず、禮制淆亂して先王の大徑大法、蕩然磨滅するに至る』と說き、その他各項目についても舊習擁護の趣旨が强く現はれてゐる。更に七年五月には右大臣岩倉具視と三條太政大臣邸に會し、先王の法服を洋服に改めらるる事、太陽曆と稱し西洋の正朔を用ゐらるゝ事等すべて二十個條につき質問狀を提出し、卽今急施すべきものとして、禮服復舊、租稅復舊、雜稅新規の分を免す、違式註違の中苛酷なるを除く、兵士復舊、陸軍を減し海軍を盛大にす、不急の土木を止む、皇居造營、尤西京の體による等が擧げられてゐる。[16]

思ふに明治初期における保守的反動思想及國粹思想家としては種々なる人を數へ得るであらうが、その最も著聞せる者は佐田介石であらう。佐田介石に關しては私は旣に屢〻之を述べたから、[17] 本稿に於ては之を省略するが要するに彼は當時盛んなりし歐化思想に對する反動思想を有せしものといふべく、その思想は極めて保守的であ

16) 岩倉公實記、下卷、185、251、254頁。
　　藤井甚太郎、島津久光公の建白と外二三、新舊時代第三年第一册。
17) 拙著、近世の經濟思想、267頁以下。同續篇、224頁以下。

り『一利を興すよりは一害を除くに如かず』とし、『便利は亡國、不便利は經濟』としてゐる。彼は舊物の存續を思ふの餘り、新事態を察せず消費を重視して生産を看過した。また前時代の鎖國經濟の觀念を棄てざるため、日本の商業も『日本限りの商法』なりとし、販路は日本國内に限るが如くに說いてゐる。從て外國貿易は輸入であつて輸出ではなく、我國は常に正金を拂ふものと考へた。恰も沈滯保守の維新前の經濟思想を以て進取發展の新時代の事象を說いた點に根本的の誤謬があり、因果關係を無限大に推し廣めた點に於て所論が往々常道を逸脫するの弊に陷つたものと考へざるを得ない。

六　餘　　言

既に述べたる如く西洋に倣ふの思想は維新前にも存する處であるが、維新以後に於ては文明開化の聲が高くなり、所謂開化思想の發展となつた。然し世俗に於て行ふ所は漠然たる文明開化であつて、單に西洋の風俗に倣ふことを以て足れりとした傾向がないでもなかつた。このときに當つて文明開化の眞義を說いた加藤祐一の「開化進步の目的」は注意すべきものであらう。

當時の所謂『開化もの』として知らるゝ啓蒙書が明治政府の西洋文化移入政策の宣傳に役立つたことは之を認めなければならぬ。蓋それ等の啓蒙書は單に西洋の習俗を傳へ之に倣ふべきことを說いたばかりではなく、明治政府の布告等を中心として開化を說き、新政策を謳歌したものが少くなかつたからである。その中に於ても經濟事象に關する種々の解說を試み、新制度の趣意を明かにし、また進んでは交易の利を說いた如きは經濟思想の發展

にも關係あるものとして特筆すべきであらう。尤それ等は直接に且嚴格に經濟學說に關する著書とはいひ難く、一般的且通俗的啓蒙的なものであるにしても、そのために經濟思想を之に求むることを輕視すべきではないであらう。

維新以來幾多の西洋經濟學に關する書籍が飜譯され、且我國學者の著述も存することは勿論であるから、此等の經濟書に於て、開國進取の說をなし、交易の利を述べたものゝ少くないことはいふ迄もないことであるが、本稿はかゝる經濟書に於ける開化思想乃至は交易思想を見んとしたものではなく、所謂明治初年の『開化もの』として知られてゐるものの中にも、經濟思想として見るに足るべきものの存することを指摘せんとしたに過ぎない。

當時の開化思想に對して反對思想のあつたことは既に一言した如くである。思ふに明治十年以後歐米の風俗模倣はやゝ下火となり、民間の急進主義に對しては政府は寧ろ保守主義を代表するが如き立場に在つたが、十七八年頃から歐米崇拜熱は再び擡頭し、かの鹿鳴館時代を現出し、政府率先して歐化の範を示すに至り、却て二十年代における保守的反動思想及國粹思想の勃興を激成することゝなつた。本稿に述べし所は明治初期の開化思想に止ることを一言附記して置く。